

<ぶどう（デラウェア施設栽培）>

- ・「おおさかアグリメール」で配信している、年間の主な作業を掲載しています。（気候条件等で前後することがあります。生育状況に応じて管理してください。）
- ・病害虫の発生は栽培ほ場の状況を良く観察し、毎月の病害虫発生情報は <http://www.jpnn.ne.jp/osaka/index.html> を参照してください。
- ・防除薬剤は『大阪府農作物病害虫防除指針<http://www.jpnn.ne.jp/osaka/shishin/body/mokuji.html>』を参照してください。

月	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
加温	温湿度管理			病害虫防除	ジベレリン処理		病害虫防除							収穫				棚の清掃						病害虫防除	土づくり		元肥					せん定	休眠打破	地温管理		
無加温							ジベレリン処理	病害虫防除		果房管理	除草		新梢管理		収穫																		せん定			
加温栽培の管理作業	<p>【温湿度管理】</p> <p>▼土壌が乾燥すると萌芽しにくくなるので、十分にかん水します。萌芽まではハウス内を乾燥させないようにし、枝にもかん水しましょう。▼日中は25～30℃程度、湿度を90%以上にし、夜温は17℃程度に保ちます。</p> <p>▼発芽期は10日間程度温度を下げて発芽をそそえましょう。日中は23℃以上にならないようにします。</p> <p>▼発芽がそろった後は、夜温をやや高めにし、生育を促進させます。曇雨天が続く場合は、夜温を13℃程度とやや低めにし、軟弱徒長を防ぎましょう。</p>			<p>【病害虫防除】</p> <p>▼新芽や新葉を食害するヨトウムシ類の発生に十分注意しましょう。</p> <p>▼灰色かび病の予防には展葉7～8枚期から幼果期まで、ビニールマルチをすると効果的です。</p>			<p>【病害虫防除】</p> <p>▼モヤの発生しやすい園は、灰色かび病の発生に注意しましょう。湿度を下げるための加温機の送風運転や展葉7～8枚期から幼果期までのビニールマルチをすると効果的です。</p> <p>▼ケムシ類、ヨトウムシ類、ミノムシ類の発生にも注意が必要です。加温栽培では、加温機周辺の葉にハダニ類が発生していないか確認しましょう。</p>			<p>【収穫】</p> <p>▼加温栽培では着色が先行し、酸の減少は遅れがちになります。着色に感わされることなく、食味重視を心掛けて収穫しましょう。</p>			<p>【棚の清掃】</p> <p>▼収穫の終わった園では、残っている果房を取り除き、棚をきれいにしましょう。</p>			<p>【土づくり】</p> <p>▼石灰資材を10a当たり100～150kg程度施し、土壌pHが6.0～6.5になるようにします。</p> <p>▼ぶどう栽培の基本は、土づくりです。牛ふん堆肥やパーク堆肥を投入し、土づくりに努めます。部分深耕や中耕も有効です。</p> <p>【病害虫防除】</p> <p>▼べと病、さび病、フタテンヒメヨコバイの発生に注意します。</p>			<p>【元肥】</p> <p>▼10a当たり成分量が窒素8kg、リン酸10kg、カリ6kgを施用します。</p>			<p>【せん定】</p> <p>▼枝先が枯れている枝は、病害虫の発生源となる恐れがあるので、枯れていない部分まで切り戻してせん定しましょう。</p> <p>▼せん定後の枝はほ場外に持ち出して処分します。</p> <p>▼結果母枝数は1平方メートル当たり3～4本残します。</p>			<p>【休眠打破】</p> <p>▼年内被覆の場合、シアナミド剤の使用は、12月下旬～1月上旬(被覆後20日が目安)に使用します。</p> <p>【地温管理】</p> <p>▼根の活動を促して発芽後の生育不良を避けるため、ビニール被覆から加温開始までの期間を長くとり、除草を行い、すみやかな地温上昇に努めましょう。</p> <p>▼加温は、地温13℃を目安に開始します。▼発芽には十分な水分が必要です。ほ場の乾燥にも注意しましょう。</p>											
無加温栽培の管理作業				<p>【ジベレリン処理】</p> <p>▼処理適期は、ハウス内温度、樹勢等により異なります。高温が予想される場合は、処理遅れにならないよう早めに処理しましょう。</p>			<p>【果房管理】</p> <p>▼落花後着粒を確認したらできるだけ早く摘房します。早めに摘房を行えば、果粒肥大や着色促進に有効です。</p>			<p>【新梢管理】</p> <p>▼開花後1ヶ月たっても新梢が自然に止まらず伸び続けると、果実の肥大や着色に影響します。</p> <p>▼強く伸びている副梢の除去や再誘引を早に行いましょう。急激な副梢管理は避け何回かに分けて行い、棚下に2割程度光が入るようにしましょう。</p> <p>▼着色初期に強い摘芯や新梢の除去を行うと、着色障害の原因となるため軽度で止めましょう。</p>																					<p>【せん定】</p> <p>▼枝先が枯れている枝は、病害虫の発生源となる恐れがあるので、枯れていない部分まで切り戻してせん定しましょう。</p> <p>▼せん定後の枝はほ場外に持ち出して処分します。</p> <p>▼結果母枝数は、1平方メートル当たり3～4本残します。</p>					